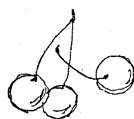


# 幼稚園におけるのぞましい活動

お茶の水女子大学附属幼稚園

## たのしかった日々



村田修子

子どもを幼稚園などに入れるということは、今までいつも一緒にすごしていた親と子にとって、生活の流れの一大変化です。

人生ではじめての経験であるこのときの親子の心持ちは、これから先に体験するさまざまなことがらのどれと比べてみても劣らないほどの重みを持ったことだと思えます。ですから、親は子どもに「こんど幼稚園に行くのだから、ちゃんとするのよ」とか「おりこうにしましょうね」と何事につけても、つい口から出てしまうのでしよう。

特に三歳児の場合など、まるで親の方が入園したような状態で、

先生が子どもに話しかけているのに、そばから親の方がかわって返事をしてしまったり、なかなか子どものそばから離れにくいようすを示すことがたびたびあります。こういう時期でも、大体の子どもたちは親の心配をよそに、水にはなたれた魚のようにのびのびと活動し、また「おりこうにできる」と一応の返事をしたひとつも適当にいたずらをしたり、自分勝手なことをいったりします。この乳児っぽさのぬけない、ぼちゃぼちゃした新鮮な顔つきや、くりくりとしたあどけない目もとを見ていると、まず第一に、つぎのようなことを考えます。

このひとたちには、ひとりひとりを充分に出させて、家にいるのと同じようにわがままもよい、気持ちのよいときには即興のうたの一つも出るようなふんいきを作るようにして、私もその中に入ってもに笑い、喜び、ときには本気になって文句もいい、しかもその文句をいわれたことが、母親のそのときと同じように、いつまでもあとに残らない、きっとしたひびきであるようなすこしかたをしたいとも思っています。

そこにお互い同士信頼感が生まれ、そうやってはじめてこちらの計画にのせられるようになってくるのです。

## ○入園当初の日目

入園したての子どもを迎えた教師は、子どもを覚え、手は、まわりについてくる子どもの手をひき、まごまごとしてつつ立っている子どもに言葉をかけ、目は、自由奔放に園の中を走りまわって、おそれるようすもなく次々と珍しいものにふれてあるく子どもの姿を追い、同時に集団生活の中で守らなければならない最低限の事柄を何度となく繰り返し繰り返し返して手をとって教えるという状態です。

こういった、おわれおわれている時期について、どうしたらよいだろうか、という問があったとしたら、私は何年経験しても「こうするのが一番よい」という答をすることはできません。ただ、こういう忙しい神経のつかれる一日一日があつてこそ、先生と子どもの間にほんの少しずつでもふれあいができてきて、ちょうど親と子どもとの間にあるのと同じような人間味や愛を感じてきて、そこではじめてだんだん自分を開いてみせてくれるのだと思います。ですからどんなに忙しくて手がまわらないようなときでも、ひとりひとりにほほえみかけ、目で話をし、すれ違いのときにも声をかけたり名前を呼びかけてやったり、いわれたことには必ず返事をし、知っている歌も一緒にうたい、手をつなぎ、ときには膝にのせてあげるような平凡なすごしかたが大切でしかも尊いのだと思います。

そしてこれがのぞましい活動をするようになるもどができていく

毎日なのです。

## ○六月頃のある一日

六月も半ば頃になると、生活が一応軌道にのつてくるので、ひとりひとりのすごしかたがゆつたりとして、安定感ができてきます。

自分たちで作ったおさかなつり



それぞれが自分のすきなことをして遊んでいても、その内容は入園したての頃とちがって、気のあう人たちが集まって遊んだり、またそのとき何かをきっかけにして偶然関係ができた二、三人の友だちが集まって遊

ぶようなときもみられます。

「たまたま、中型の積木を長く並べていたとき、その並んだ積木の先がへやのすみにあった売りやさんごっここの台のところまできてしまい、その一つをその台の上のせたことから、「ここはアイスクリームだよ」といい出して、長い紙を探してきたひとりが私に「アイスクリームや」と書かせて、それを台にはりつけると、他の人がまた紙をもつてきて「いまはおやすみです」と書けとか、「もうじきうります」などいろいろの看板をかかせて、台にところかまわずはりつけました。

そういうようすをうらやましそうに見ていた三人が「いれて」と加わり、おみせにはいりきれないひとは、積木をかかえたり、なれない手で包み紙に包んだりして、呼声をたてて売りあるきました。

そういった遊びの経験のない人や、積極的に「入れて」といえない人たちは、自分たちの遊びをやめて、盛り上がったふんいきの「アイスクリームやさん」のようすを見ていただけです。

三歳児は大変に個人差が多いので、こういうような場合、遊びに入りこんでいる人たちは興にのって楽しくて仕方がないので、ほかのことをしているひとの誰かれかまわず浮き浮きした気持ちで接して、ほかのひとの遊びをこわしたり強引に自分の遊びをおしつけたりすることがあるので、相手によっては「あの人はこわい」とか「乱暴だ」という印象を与えてしまうこともあって、それがあとま

自家製たいこ、バイオリンなどの楽隊のあそび



で尾をひいて困るようなこともあります。

この遊びに入れない人たちからは、驚きとか、うらやましい、という気持ちを感じられましたので、ちょうどよい時期をみはからって、「おもしろいおみせができたわね」「みんなで買いにいきましょう」「ああ、そうそう、おかねを持っていかないと売ってくれないかもしれないから、あの電話で聞いてみてちょうだい」と声をかけてままごとのコーナーにいるひとに電話をかけてもらったり、値段をきいたりなどして、おみせとままごと遊びのところのひとに關連をつけたり、それにも入れないひとたちをきそって一緒におかね作りをはじめました。そこでは、おかねの形や、色や、みたことのある

なしなどの話をしながら作ったり、入れ物がないとなくしてしまうことをいい出したひとのことばをとりあげて、おかね入れを作ったりすると、思わぬときに全員が製作に参加し、それぞれが知っている知識を出しあって、結構いろいろな形のものでき上がっていきます。

おみせやさんだったひと、友だちが、自分のおかねや入れものを作っているのがうらやましくなってきた、これに参加してきたり、早くできたひとがおみせやさんに早変わりしたり、おかねを知らない人が「本当にこれがかえるの」と目を輝かせたり、その入れものを大事そうに一日手から離さなかったり、という姿をみていると、その新鮮さに涙が出てきそうになります。

教師側がたくらまないでも、このようにみちみちた、豊かな流れの一日もあります。

子どもの側から遊びが出てきて、それが更に発展してきたときに、「おもしろいおみせができたわね、おかねを……」と言い出す時期が適当でないと、せっかくの遊びがよりよく発展しないで、ただ追いかけたり、逃げまわったりということになり、終わりにはびっくりかえるような騒ぎになってしまいます。ですから、そのチャンスのつかみかた次第。という場合が非常に多いように思います。

いうならば、こういう一日は、「のぞましい活動をした一日」ということになるでしょう。けれども、いつもこのようにうまくこと

が運ぶとは限りません。振り返ってみると、のぞましくない、というより、何か得るところがあったかしら、と考えてしまう一日もたくさんあります。

また、いままであげてきた例のように、一つの遊びを発展させるようにつとめるのですが、それが思わぬ方向、おとなからみると好ましくない方向にいつてしまうことがあります。そういう場合は全員の気をそらさなくてはなりません。今日は何をして……という計画があったとしても、それはさておいて「今日は学校のグラウンドの方に遠足にいきましょう」とか「兎が新しいごちそうをくれているから、山の上の方へとりにいきましょう」などといって、先生がはつきりした態度で気分を転換させなければ、今までの遊びを忘れさせることはできません。こういうとき、ほかの遊びをたくさん知っていること、とっさにくふうすることができるとは大変強味です。

### ○二期のある日

へやの中で遊ぶことが多く、さそってもなかなか庭に出ようとならないことが気になっていたので、みんなをさそって園の外を歩いて帰ってきてから「おもしろいことをしましょう」といって「あぶくたった」の遊びをしました。もちろん、この歌や遊びを知っているひとはほとんどなかったのですが、言葉のやりとりのおもしろさ、

七匹のこやぎごっこ 1 (かわいい狼の訪問)



七匹のこやぎごっこ 2 (たべられないうちに逃げましょう)



ているうちに、それが「七匹のこやぎ」の店に似ているところから、七匹のこやぎごっこになってしまって、おとなはいつも狼にされました。そして毎日毎日あきずに繰り返し返されました。

この遊びのときは、組全体が一つになって遊ぶよい機会で、このときから庭へ出て遊ぶことが多くなりました。一人っ子のYちゃんなどはいつもひとり

鬼あそびになるスリルがあるので逃げて逃げてとうとう遊戯室の前の一段高くなったところを自分たちの家のみたてて逃げこみました。そこにはいって、みえないかぎをかけて鬼である私をその中に入れないようにしたり、男の子は指で鉄砲を作り私をうつまねをしたり、またそこからちょっと出てからかかってみては逃げこんだりし

で勝手なことをすきなようにしてへやの中でばかり遊んでいました。が、この遊びを経験してから、「あぶくたったしようよ」と言いそくしたり、「ぼくは外で遊んでくるよ」とすんでいうようになりました。今まで全然知らなかった世界の扉を開いて、経験の幅が広がってきて、いまはおもしろくて仕方がないというようすです。



これから考えても、いろいろの体験をさせてあげることの大切さをつくづく感じます。

三学期にはおとながはいらないでも、自分たちでまとまって遊べるようになりました。

その特徴として、自分たちで作ったものを使って遊んだことです。組木や、紙をまるめて作ったピストル、紙をまるめて胴体を作りはねをつけたひこうき、紙の箱に車をつけて引っ張れるようにした箱車、犬などいろいろのおめん、おめんのわくにストローを二本つのようにつけてマグマタイシごっこのおめんにしたり、年長組が劇のときにした蝶のはねを同じように作って背中につけてとびまわるなど……。

思い返してみるといろいろな遊びがくりひろげられました。が、「何を指導した」というよりは、一緒によく遊んだことと、自分たちだけで遊べるようにするために、何かと理由をつけてはその中からぬけ出すくふうをしたことが一ばん印象に残っています。

ただうまくいかなかったことは、男の子と女の子がはっきりと分かれてグループを作ってしまうことです。お互いの交流をいろいろ試みたのですが話題・使うことばの種類・遊びの傾向が全然違うところが原因の一つだと思いますが、このことだけが、のぞましくない傾向です。そして今日新しく入園してくる人とまぎって人数が多くなったときにどうなっていくかが問題として残っています。